

細胞内の情報

「伝達役」発見

京大研究チーム

京都大学の研究チームは細胞の外側から内側に情報が伝わる際に、いかだ（ラフト）に似た構造の脂質が瞬間につくられ、伝達役を果たしているのを突き止めた。ラフトはBSE（牛海綿状脳症）やエイズウイルスの感染、アルツハイマー病発症にも関係していると考えられており、病気の解明の手がかりになる可能性もある。

京大再生医科学研究所の楠見明弘教授と鈴木健一特任助教らの成果で、米科学誌ジャーナル・オブ・セルバイオロジーの五月二十一日号に掲載された。

ラフトは細胞膜上を動

いたり止まったりしながら、他のたんぱく質と〇・一〇〇・二五秒ほど結合し、細胞内にカルシウムを分泌する指令を出していた。楠見教授は「ラフトの存在は予想されていたが、生きた細胞で直接見ることはできなかった」と話している。